１９２５年（大正14年）〔21歳〕

「辰雄日誌１９２５」No. 7 （1）

――１９２５年６月１～30日――

小池辰雄

○１９２５年６月１日（月）

晴、雨。『ルッター研究』第１巻第２号来る。感謝と歓喜の声!!　夜、雷雨！

雨は我が為に祈り泣く。

雷は我が為に轟き光る。

神の光の峻厳熾烈なるを見る。

時に創世記第１章第１節より読み始む。第６章まで。

ああ、我、なまけし者よ。しかれどもおそるるなかれ。前途は洋々たり。汝が奮闘は実にこれからなり。

○１９２５年６月２日（火）

晴。……〔独文省略、ヒルティーからの引用〕……。

敬愛するヒルティーの語がまた、僕の体験をもしばしば語ってくれるのが実に慕わしく、且つ僕にとって力づよく感ぜられる。ヒルティー、ケーベル、両先生のいかに自由な、純真な、使徒的信仰を有し居られしことよ。この二人の良友、恩師を近頃、近く招し得て、歓びの人の思いにすぐるものあり。学校の友達よ、汝等はヒルティーの『グリュック抜粋』（２、３を抜いたもの）を読んで、果たして解し得るや。我、甚だあやぶむ。而して悲しむ。まして、然り！と共鳴する者をや。信仰と確信を以て書かれたるヒルティーの筆は、やはり信仰と確信を以て読むにあらざれば真に解し得ず。かく厳確に見れば竟に一人もない。悪評までもなさんとする者あり。これまた宜（うべ）ならずとせんや。先生の御講義を俟（ま）たずして、これを解し得る様になりたいものである。独乙語の力、独乙語の力、勉強勉強、不断の勉励、これあるのみ。

George Meredith〔ジョージ・メレディス（英国作家）〕の “The Shaving of Shagpat”〔シャグパットの剃毛（ファンタジー小説）〕は面白く、且つ真理の水を多量に含んでいて、これをしばしば汲み得るのは実に有益な書と云わねばならない。今まで学校でやったかかる種の本の中では一番である。しかしてこの物語が僕自身の Life〔人生〕に何か Suggestion〔暗示〕を丁度、Shibli Bagarag〔シブリ・バガラグ（ペルシャの床屋）〕のそれに於けるが如くに与えているのではないかと思われることがある。〔註：ペルシャの床屋であるシブリ・バガラグと魔女であるヌールナは、魔法の髪の力で街を支配している暴君シャグパットを剃る冒険を与えられる。途中でシブ

リは魔法の剣を手に入れ、しゃべるタカやいくつかの魔神を含む一連のエキゾチックな生き物と出会う。（ウィキペディアより）」

基督者は誤解される。それは偽基督者がいたり、今の所謂教会基督者のためにである。いつの時代でも真剣な人というものは、一般人から悪く、変に見えるのは同じだ。しかり、真剣な人には、この世はあまりに汚れている。あまりに合わない。この世では苦、それが永遠の歓びである。暫時的のもの（phemerisch）と永久のもの（ewig）とは両立せぬ。しかしてかかる人には、世と調和することの方が、はるかに苦である。それは良心に反することであり、神によることに反することである故にである。

Luther's Table Talk〔ルッターの卓上語録〕は5月12日から読み始めたが、今日82頁に来た。毎日少しずつ。Of God's Word〔神の言について〕、Of God's Works〔神の業について〕、Of the Nature of the World〔世界の本質について〕がすんだ。平易に書いてあって、大抵解し得て、よき日々の読書である。

そろそろ学校の勉強を始めなければならない。7月に入ると試験だから。

○1925年6月3日（水）

雨後晴。永遠生のこと、神のこと、来世のこと、キリストのこと。これ等に限らない。真理というものも、聞く人、見る人に真に求めんとする心、如何なるものならんと心を空しくして、「我」をすてて見聞きするに非ざれば、それは到底入るものでない、解るものでない。最大のものを有てるものよ、心を堅うして起てよ。汝の道に起ちて、あやまりなきは確実の確実なるものなり。

１９２４年、柏木今井館に於けるクリスマスの晩を思い出だせよ。神は何と仰せられたか。内村先生は何と言われたか。感涙なり。

「汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし」（ルカ21・19）〔ギリシヤ語〕

○1925年6月4日（木）

晴。フットボール1時間、痛快だった、竟に無勝負とは。両軍の技量伯仲には相違ないが、拙劣で伯仲、所謂ドングリのよりあつまりのためである。文3乙は、全くドングリの寄り集まりである。またそれだけ一致性を強く有っている。文字通り、身長もかなりドングリである。昼食を学校の前のオヂンツァン（パン屋）で認めることとした。6月の様な月には一食パンは至極よい。そして、図書館にも行けるし、二階の教室で昼寝も出来る。とにかく便利である。

安いもの、何かと云えばすぐ値段、安いからというのが近代家庭を持つ人の口ぐせか、頭の虫か、なさけなくなる。学生間にも往々見るところ。別に「ブル」ぶるわけではないが。あんまり、金、安物、ということばかり耳にさせられるので、愛想がつきた。そんなに「金

が惜しけりゃ、やらい」とまで言いたくなる。悪口タップリ。

何故に、人よ、日々、崇高なものを仰ぎつつ、敬虔な心にて生きないのか。近代人にかかる時間が一日に寸時もない。あまりに俗化している。第一に読むものは新聞である、雑誌である。そして最後に読むものも新聞である、雑誌である。中に読むものは何か。無いか。あっても大したものでない。あわれむべき人々よ。

哲学、ギリシヤ哲学史は面白い。今日はLogosidee & Messiasidee〔ロゴス理念とメシア理念〕というところへ来たが、益々以て基督教の最大を思わざるを得なかった。基督教は哲学的、或いは論理的のSystem〔体系〕ではない。力ある、生命ある、生けるところの最大の真理たるは疑を容れぬところである。しかしてこれこそ、人生最大の目的にして、救の完全である。哲学の最終である。キリスト在まさざれば我は死である。

「1**太初**（はじめ）**に言**（ことば）**あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。**……14**言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり、我らその榮光を見たり、實に父の獨子の榮光にして、恩惠と眞理とにて滿てり。**」（ヨハネ1・1、14）〔独文〕

使徒ヨハネをしてかく云わしめたるは何であるか。多くの真誠なる基督者をしてかく実感せしむるものは何であるか。

○1925年6月5日（金）

晴。独乙語会あり。午後3時半頃、グンデルト先生のお宅へ行った。来会者、文3乙10人位、理3乙10人位、合わせて20人位であった。歌や、Teller! Teller! Drehe dich!〔皿よ、皿よ、回れ！〕をして遊んだり、そのNrafeのあそびが面白かった。6時頃退参した。“Aufwiedersehen!”〔サヨナラ〕と云って。とにかく僕たちのsprechen〔話す〕のモドカシイのは、自分ながらあきれるほどだ。こんなことでは駄目である。大いにやる。詩なども暗誦しよう。今度の会のときはGundert先生を驚かしてやろう。auswendig lernen〔暗誦する〕。Schiller“An die Freude”〔シラーの「歓喜に寄せて」〕を暗誦する。先生の二人の女の子もお話をした。とても発音がきれいでうらやましくなった。サスガは自国語だけある。

○1925年6月6日（土）

“Es ist nicht wahr, daß die gerade Linie immer der kürzeste Wege ist.”

――Lessing〔直線が常に最短の道であるというのは真理ではない。――レッシング〕

真理だと思った。「はやいばっかりが道じゃない」と。我々は時として、行きつまる道へも入って行く。そして、行きつまりを知って、かえって光明の光明たるを明らかに知って、それからその光明の道めがけて驀地（まっしぐら）に進む。そしてこれがかえって、救われたる、しっかりした、そしまた真にすみやかな道となることがある。僕の経験と思索によって、おぼろながらもこれを覚える。

満月、高木八尺様に御音信する。

○1925年6月7日（日）

午前を主の御前に小室にて。午後もほとんどうちに居た。夜は窪島様を訪問した。三弦さんが帰って来られた。東京へ昨日行かれたのである。泰ちゃんの問題で、叔母様が大変心をさわがせて居られる様である。不信の人は、事に会して此くの如く騒ぎまどうと思った。これはよき徴であるのかも知れぬ。

何はともあれ、我々基督者ほど実際、安らかなものはない。言論を弄して気焔をはく雄弁家よ、評論家よ、汝等の運命は見えすいている。すべて嘆きの谷底である。知らざるか、大能の神、我等をよく導き給う一事を。これを知らざる故に、すべての悪、罪、闘争が汝等をはなれぬのである。

学校の哲学の先生、山田先生よ、その如何にもユッタリした先生の心事を思いて、人はよしとするかも知れぬ。また御自身も理想と芸術を望みて、悠然と人生を楽しんで居られるかも知れぬ（そしてこれは実際、先生自身言われた）。しかし、そのゆったりさと我々のこの歓喜と感謝と神の讃美と何れが人生をして真の人生たらしむるものであろうか。先生が本当に困難に会することあるとき、果たしてそのゆったりさ、一大芸術品を傍観する如く（と先生は言われたが）して居られるだろうか。そのこの世をさるにあたりて、果たして、何等かの淋しみがともなわないであろうか。それでも先生は、よしと本当に心から思われるだろうか。もし真に然りとせば、先生は残念ながら神を知らざる人と云わねばならぬ。もし、何等かの不安を生ずるならば、先生は神を知り得る人である。然らば何故に真に神を知りて、神の子として人生をおくられないか。このことを申し上げたいが、僕にこれを申し上げる資格も能力もない。ただ祈り上げるのみである。

今日思った。グンデルト先生がもっともっと信仰の人なら、どんなに立派だろうと。先生の人格、敬服するところはある。しかし、何だか真に近づかんとすることが出来ないのは、先生のために嘆く。先生の信仰のために祈り上げる。

窪島様の奥様、いい方である。その御親切さ、優しさは本当に嬉しく受ける。若し彼女に信仰あらばといつも思う。彼女の如きは、信仰に入られるには最もやすき性質ではないかしら。

父なる神にねがい奉ります。願わくは、信仰の勇者たらしめ給いて、接する人々をして主の愛を小さき僕からも流れ出でさしめ給え。そして彼等を主に導き給え。アーメン。

○1925年6月8日（月）

晴。昨夜、窪島様の帰り、月の出ているのを見て安心して寝た。果たして今朝はよく晴れていた。ゲートルをつけて出掛けた。８時集合。銃を担ぎ剣をつけて隊伍を組んで、全

校性は練兵場へと向かった。僕達は守備軍であった。文3乙は怪しからぬ、4分の1位しか出席しなかった。銃丸の分配は豊かであった。20発宛わたった。痛快に打った。名誉の戦死をとげた。天幕張や飯焚を見学、兵営へ行って、軽、重機関銃の構造、組立、分解等及びその演習を見学した。昼食は兵営内で食べたが、兵隊さんの食べる御飯はたべさせてくれなかった。これが食べたかったのであったが。何しろ、パキパキした動作は見る眼も気持がよい。実際あの様にキビキビやればやっても気持がよく、疲れも、だらだらはやるよりはないわけである。かく思えば我々も彼等に習ってやるべきである。なぜやらないか。僕はかのだらだらは大反対である。馬鹿らしいだの、何だのかだのと口が先な人間は禍なる哉である。小貫中佐は、しっかりした人格者であるらしい。皆も中佐に指揮されてはしっかりならざるを得ないだろう。石川先生に於けるより以上だ。

兵隊の身体を見ては、全く羨ましくなる。何も要らない。あの身体が要ると思った。あの身体があれば、僕の志すことはどんなにテキパキと出来ることだろう。然り、その偉大な身体はよし与えられぬにしても、信仰によりて健全なる強き身体は必ず与えられる。故に、信仰に歩むべきである。かく確信して躍如たらざるを得ない。今日もまた野外に色々とよいことを教えられて来た。皆が野外に演習するときに、ズベッて家にくすぶったり、勉強したり、勝手な遊びをする奴のあわれむべきことよ。彼等は、精神的病者なりとまでも酷評したい。第2学期には一泊で（野外）発火演習があるとのこと。さてそのときにも行ける様な好い身体を作ってやろう。この夏もまた待たれることの多き哉。

机上左方にありて我を守るものは誰ぞ。絶世の作曲家、偉大なるベートーベンである。彼の真剣な顔、その深き光の眼、その広き額、その峻厳なる口、彼の眼は何を望み、何を睨んでいるのか。偉大なるベートーベンよ。願わくは、僕を睨んでくれよ。而して僕をも睨む人としてくれよ。

神様、全世界の忠実な真心の人を、願わくは、あわれみ給え。御恩恵を垂れ給え。基督者にもあれ、基督者に非ざるにもあれ、彼等は父の御心に叶う人でございましょう。今日、私はそれを第2連隊兵営内にて見て参りました。無名の兵士、彼、最も下位に働きて忠実、謙遜、真心なる彼を、神よ、願わくはめぐみ給え。よき同僚にも目立ちて私の眼には忠実に見えました彼を、願わくはあわれみ給え。彼は書を読まず、所謂我々の如き知識なくも、如何に我々より貴き者でありましょう。我々は、彼に比して彼の御眼より見るときに、いと小さきけがれたるものでございます。願わくは、私も彼の如く聖旨にかなうものとなさしめ給え。……〔独文省略、ゲーテの言の引用〕……。

演習して来て、「つまらなかった！」「馬鹿にしやがらあ」「くだらない」とか言う語の出る人は、かわいそうな人である。それはやることに忠実にならない最も明らかな証明である。忠実にやる意志があれば、そこに興味が来、そこからまた何ものかよきものを得てくるにちがいない。すべて心次第である。見えない「この心」というものほど大切なものはない

のに、どうして皆、己れの最も大切な心を粗末にして己れを害するのであろうか。禍これより大なるは真にないのである。食物だって、勉強だって、何だって同じである。粗食を不平を言って食べるのと、感謝して食べるのとで如何に身体に影響するかはわかったことである。美食といえども、心に不満ありて食しては駄目である。凡そ人の心ほど人にとって大切なものはないのである。

○1925年6月9日（火）

天気はよくない。風が吹いたり、雨が降ったり、暑かったり、蒸したりである。ただ内なる我に恒（つね）あらんことのみ。ヒルティーを習っていることは僕にとって有難いことだ。ただし、随分むずかしい。試験準備をしなければならないのに、まだ手がつけてない。

「明日、明日と怠け者は言う」。

本が左右に山ほど僕を呼んでいるのに、僕はそれを読むこと極めて少なく、のろい。本に対して泣いてあやまりたくなると共に、我と我が身を鞭撻（べんたつ）して励むのである。

○1925年6月10日（水）

『聖書の研究』来る。感謝してこれを受けた。相変わらず、内村先生の御本は言々句々、骨髄に徹するをおぼえる。然り！アーメンである。青線を引くのがくせと思われるほど曳かざるを得ない。何故に然るか。先生、聖霊によりて書き給う。私、聖霊によって読む故にである。来月号を以て「第300号」になる。先生の随想数十年のお顔が浮かんで来て、僕はある絶大なもののとらうるところとなった。主の

「汝等耐え忍びてその生命を全うせよ」

との御声がした。ああ、300号、しかして、幸なる哉。僕は255冊を有する。これ実に僕の宝である。僕は遂に本よりほかにこの世にこの宝を知らぬ。本は即ちバイブルである。バイブル＝聖書。而して僕の本というのは、バイブルを幹とすればその枝葉になるところの本である。即ち、純真な信仰の上にて書かれたるところの本である。

『聖書の研究』然り！『旧約と新約』然り！　その他、クロムエル伝、リヴィングストーン伝……

数えあぐればかなりあろう。然り、僕の有する本の半数は少なくとも生命ある愛すべき本である。僕に一般の小説を読むの心なく、遑（いとま）がない。

内村先生へ簡単ながら感謝の御手紙を出した。随分、躊躇（ちゅうちょ）した。それは第1回の（初めての）先生への御手紙であったからである。しかし、遂に意を決して出した。それは僕は、3年前1923年の明くると共に先生に救われて以来、先生によって導かれること甚大にして（講演、著書、雑誌）、昨年のクリスマスには、会員でもないのに特に入って、感謝なる晩をすごさせていただいたときの霊感は脳裏に徹して居り、今日ますます深く導かれ行

くを感ずる故にであった。

内村先生と藤井先生と、嗚呼何と僕は幸なるものであろう。かかる先生を恩師として我が人生の道を歩み行くとは。僕は実際、自分でおそろしくなるほど、不思議なほど――これは到底普通の人には解らない――聖霊に直接導かれた。故に、あやまれる信仰に入れる人々が、色々と人生問題、基督者問題等に頭をなやまして、真に救われざる人々が長い時間かかりて経験するところを殆ど経ず――短期間あったが――直ちに聖書による、ルーテルの信仰に入り得た。これは実に奇蹟である。基督教をケナシ、「聖書」という語を聞くだにいやな気持のしたことのあった僕が、かくも短年月の中に、聖書を最も愛し、神に最もすがらざれば居られざる人の数に入るとは。

実に兄上、高島鴻子伯母様の犠血は貴かりしよ。涙に咽(むせ)ばんのみ。こう言いて僕は決して、真に基督者生活の典型をふんでないことは明らかである。僕は罪人の罪人である。まだけがれと罪は毎日多くおかしている。しかし、心は最もこの罪をきらいて神に向かっている。それは神もはなれるときもある。祈る。書を読む。改める。その心事は言い表わせぬ。とにかく、真面目に信仰の基に起(た)たんものである。

○1925年6月11日（木）

そろそろ試験勉強にかかった。今日中に完全に準備をしてしまう計算である。

○1925年6月12日（金）

晴。今日、赤坂の渡辺為蔵様、千鶴代さんの姉上様、その御令息マーちゃん、なほ子さんの4人が来水された。公園に行かれ、帰って来られて賑やかであった。夜は8時半まで遊んだ。

神様、願わくは内村先生、藤井先生、畔上先生の信仰を信仰として導き給え。まことに日本に、しかもかかる世に下された至宝でございます。願わくは、多くの知らざる人々をして純真な信仰へ導き給え。願わくは、母上をあわれみ給え。私の母上に負う御恩は実に実にはかり知れないのでございます。しかして、母上様は――聖旨によりますと信じます――肉眼の明を失い給いまして、安けき生活に入り給い、加うるに永久の光、生命、歓びを与えられましたことを、涙を以て感謝したてまつります。願わくは、日一日と信仰を深くし給いて益々光の子となさしめ給え。光子とは今にして本当に意味あるものなることを感じて、歓びと感謝の至りでございます。

願わくは武田の叔母上を先ず信仰に入らしめ給え。兄上（召されし）は彼女のために祈りました。そして、私が残されてここに継ぐ御命を受けました。願わくは彼女を信仰に導き給いて、今の如くならず、真に心から手をとって感謝し歓喜する身と彼女をなさしめ給え。

無信仰なる某家庭、若し聖旨ならば救い出し給え。私もそのあわれむべき心の中をおも

いまして悲しみます。願わくは、眼前のことに急にして少しも永生を考えざる是等の人々をして眼を遠く、高く向けさせ給え。彼等は思わざる時に大きななげきに遭うことを知らないのでございます。

願わくは、私の同窓の友、及び諸先生を信仰の道へ導かれんことを。友のあるものは、あまりに自己「我（が）」が強くして、学問の力にのみ、知識の力にのみ、自分の判断の力にのみたよりて、神の聖旨を少しも解することが出来ません。かかる霊をやわらげ給い、くずおれたる魂にまで導かれんことを。ああ、40人の級中に、我が友は一人もないのでございます。然して、全校に真にパウロの信仰に起ちて奮わんとするもの何人ございましょう。かく思いますとき、孤独を感ぜざるを得ません。単独、孤独でありますか。しからば、私の使命は神様、何でございましょうか。私は法科に入学するには余りにも選ばれたるものではないでございましょうか。経済、政治、法律を修め研究する人々は多く居ります。宗教の方面、人の本当の生命のことのために心を向けるものの少なき世よ、かく向けらるる私は、神様に聖旨ありて、かくあるのではないのでございましょうか。

神様、私はしずかにうかがいますときに、神の御ささやきの細きながら確かなるを聴くのでございます。親類の人は皆、それぞれ官吏、実業の方面に行きましたが、私独りは別の方面に向け給わんとの聖旨でございましょうとの感は近頃次第に強くうかがわれるのでございます。かくなりましては、私は奮然として起ちたいのでございます。父なる神様、願わくは御力、御光、御恵を十分に現わし給いて、私をして聖旨に叶うものとして働かしめ給いてよ。罪の贖主、貴き主イエス・キリストの御名により聴（きこ）し召し給え。アーメン。

1925年6月12日夜、9時～10時。

独文科であるか、宗教科であるか知らない。とにかく、専心、独乙語の勉強をする。

○1925年6月13日（土）

実のあること、生命のあることの外、考えるのがいやになったり、書くことをこのまなかったりすると、本当に生活は単純、正直――虚飾がなくなって――になって愉快。それは聖なる歓びを感ずる。思想も単純ならざるを得ない。婉曲（えんきょく）な修辞法や形容句などがいやになる。率直になって来る。したがって文も単純、簡潔、強烈となる。しかして深みがある。内村先生のなんかは確かにそうであると思う。

第4時間目、山田教授の独乙語の時間を皆ニゲタ。苟（いやしく）も文3乙の生徒が独乙語の時間を、先生が気に入らぬと言って逃げていいだろうか。生徒にかかる勝手が出来るものだろうか。午後は皆で大洗へ半日の清遊をなした。太平洋上に虹の架する景は雄大であった。夜8時に帰宅した。愉快な半日であった。水がつめたくて泳げなかった。

〇１９２５年６月14日（日）

午前９時より12時まで、聖書と『聖書の研究』とで。讃美歌19、213、185。静かな午前を独りにて。東京の空をのぞむ。午後から学校へ行く。山県高等学校との練習対抗競技、27対27の接戦に、１５００ｍで32対29となった。野球戦もやっていた。

聖書之研究、「霊魂の貴尊」にて深く感ずるところがあった。僕もまた神様より或る一使命を授けられたる神の器である。そしてまた僕の霊魂は神を信ずるときに実に尊かるべきを思う。夜、母上、叔母上（武田）へ御手紙を差し上げる。

明日よ当分、日記は簡単となる。と書いたものの、試験準備よりも日記を書いて考えたり、祈ったりすることは大切である。否、これをしなくては生きて行けないのである。

〇１９２５年６月15日（月）

雨後晴。

「辰雄さまは本統に選まれた方と喜んで何卒お父様の御ふところにいつまでもと願って居ります。北京も御祈り下さいます。藤井先生も助けて下さいます。本統にうれしきの極みであります」

と１９２３年11月3日の高島のまま様の御手紙の一節を拝見して、僕は断腸の思いに涙がこぼれた。かくよろこんで下さったまま様に、なぜ去年の夏、召される前に御手紙をさし上げなかったか。当時やや信仰の冷えていた僕に伯母（まま）様にそれだけの熱がなかったのではなかったか。ああ、罪のこの身よ、まま様は御心配をされはしなかったか。ああ、罪のこの身よ、この最後の御手紙に何と答える。

まま様よ、願わくはゆるし給え。願わくはお父様におゆるしのお祈りを天にて捧げ給え。まま様の御あとに従いましてかたく歩まんために祈り給え。その時至るまで。アーメン。

今日、渡辺様御一同帰京された。学校の図書館で、ケーベル先生続小品集中、「レッシング」を読む。得るところあり興味わいた。しかしなかなか難解であった。大いに読書しなければならぬと思った。

〇１９２５年６月16日（火）

晴。人あり、富豊かにして書を意のままに買い得、立派な書斎を有して、厳めしくまた美しくならべたてたりとす。彼、外観まことに愉快なるものの如し。また、人の眼より羨ましげなり。しかれども、その内容たるや如何に眼のとおらざる書あり。飾りのための不用の書あり。我何ぞ彼をうらやまんや。

人あり、彼は忠実に、己れの腕にて（忠実なる）金を得、彼の金は少なし。しかし、彼のなるが故にその金は貴し。彼は良書、必読の書を買う。彼はかかるものを買うために倹約をなす。彼は高価の書は之を図書館にて読む。彼の書は良書のみなり。皆よくよごれたり。

ああ我かかる人をほむ。したわし。なりたし。

○1925年6月17日（水）

晴。夏の日長し。軍隊練教始まる。ゲートルを付けてやる昔の体操に帰る。午後からの時間の眠いこと。昼食のあまりうまからぬこと。暑いためだろう。それに比すれば、夕食はうまいこと一層である。昼休みの時間と第5時の歴史（休みのため）の時間を利用してレッシングの「人類の教育」（訳）を読んだ。健全なる思想と思った。自由なる純なる信仰と思った。レッシング「人類の教育」、

91「永遠なる摂理よ、汝の識別し難き歩調を歩め！　唯吾人をしてその識別し難きが故に絶望することなからしめよ！　仮令（たとい）汝の歩調が余には逆行するが如くに見ゆることがあるとも、汝に絶望することなからしめよ！　……最も短き線は常に直線なりと云うは真理ではない。」

100「或は又、かくては余りに多くの時が余にとって失われるが故であるか。――失われる?――所が余は一体急いでしなければならぬ何物かを有つか。全永遠は余のものではないか。（余は何も急ぐ必要は無いではないか）」

所感再三。我は先ず「死」なねばならぬ人間であった。我が罪はあまりに大、多、深であった。そして罪の大なるもの、「むさぼり」は「死」への近因をなして遂に現われて来た。我は斃（たお）れた。病床の苦をうけなければならなかった。殆ど肉体の死にさえおそわれた。然れども、神よ、神は救い出し給うた。我が病床に居て、我、知らねどもあるなにものかが我をシカと攫（つかま）え、上に向かわせるのを感じた。

幸にして病は癒された。しかし愚鈍不信の我は直ちに蘇（よみがえ）らなかった。徐々に神の御光が暗黒の余に入り来り給うた。１９２３年の春には煌々たる光のさし来るを感じた。その光も時には雲に遮られた。光を忘れたこともあった。しかし、光を慕うの心は我に消え失せて居なかった。

やがて、冷えたる心の燃やさるるときが来た。１９２５年の春（１９２４年のクリスマス、１９２５年復活祭）に雲は一掃された。雲はなお来らんこともあらん。しかしもはや、光はあまりに強くある。あまりに慕わしくある。故にもはや遮る雲を通して御光を望むことさえ出来る。ああ神よ、いかばかり我は感謝に満つることよ。滔々（とうとう）として流るる世の濁流何ぞおそれんや。我は神より、その濁流に溺れんとする人々を救わんために選ばれたものなるを知る。濁流の一人たりし我、かくも尊大の言を放ち得るや。ゆるし給え。然れどもキリスト、ただキリストのみ、誠に我を救い給えり。我が使命は、キリストのあかしをこの小生涯に於て神のゆるし給う限りに於てなすにあり。

「真理は独り神にのみ属す」（プラトー）

「[3]**また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕**

にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、
……[22]われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。[23]都は日月の照すを要せず、神の榮光これを照し、羔羊はその燈火なり。
[24]諸國の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光榮を此處にたづさへきたる。[25]都の門は終日閉ぢず（此處に夜あることなし）[26]人々は諸國の民の光榮と尊貴とを此處にたづさえ來らん。[27]凡て穢れたる者また憎むべき事と虚僞とを行ふ者は、此處に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此處に入るなり。」（ヨハネ黙示録21・3、22～27）

「人類の教育」これはまた僕がやがて問題とすべきものではないか。日本の教育を思う。根本の空なるこの教育に何がなる。実のなるすべなし。宗教、真理、生命の宗教の上に立たざる教育は何である。そんな倫理の上に人が出来るか。湧き出づる奥深き源泉を有せざる濁水を飲みて生くる日本の幼児は、暫時（ざんじ）はよからん。しかれども大なる喝、必ず来りて、死あるのみなり。されば、これに心づきたる兒等は、はやくこれを棄てて、永遠の泉を求む。ああ、禍なる我、徹せる原理に基かざせる教育、更に言えば、宗教なき教育！

Lessing〔レッシング〕その独子を生みて失いしときの“Graßlich wilzig”〔ゾッとするようなしゃれた〕なる書簡よ。ここに深き意あり。Lessingの次の言語（コトバ）は（もし僕をして言うことをゆるすならば）正に僕もかく言いたい。

「しかし先生、あなたは一体なぜ何時も同じ事を仰せられるのですか」
「それは主の命じ給うた所であるからである。もし実現されるならば、唯それのみで、唯それのみで十分だから。否、十二分だからである」

と。僕に於て根本は、キリストの十字架と復活の外、我をして何も言わざらしめよ。

St. Paul, St. Augustinus, Luther, Koeber, Hilty, Lessing, Uchimura, Fujii, Azegami, ……

如何に慕わしき名よ。敬愛する師よ。私の言うことも導かれて、慕わしき諸兄の音調を含まざるを得ず。聖霊に導かれて、確信を以て云われる言は、聖霊に導かれてのみ解し得る。実験の言は実験を以てして初めてよく然り！と言い得る。

聖霊は一つ、信徒の心も一つ、故に合致する。あに不可解ならんや。かくも貴き諸兄に従いて、然り！アーメン！と称え得る身となりたることの有難さよ！　讃美せん、神の御名を。栄光限りなく彼にあらんことを。アーメン。

ああ、信仰うすきものよ、何ぞ神に信頼せざる。ああ、信仰うすき世の人よ。ああ、信仰なき世の人よ。ああ、我が身辺の人よ、何ぞ神を思わざる。世の悪を知りつつ何ぞ共に歩むや。汝等は世より善なるが如く思えども、やはり世と共なるを如何。ああ、信仰なき我が身辺の人々よ。何ぞ神に信頼せざる。我、神に祈るなり。我が親戚の者等よ。我が交友等よ、滔々たる世の流れより脱せんとするものあれども、汝自身を棄てざる限り、それは水泡である。

汝等は先ず、深く内省せよ。何を見るか。何ぞその眼の傲慢なりしを思わざる。罪、汝等は第一にこれを真剣に思わざれば、万事は正しきにおもむかじ。

○1925年6月18日（木）

晴。政美兄上様よ、ああ何と僕の歩みはのろく、よわく、しかも曲がっていたことでしょう！　兄上よ、まだ僕をゆるして下さいますか。この高慢なる僕をゆるして下さい。

ああ、大きい兄さん、なつかしき兄上よ、愚鈍不信のこの身をどうかゆるしてください。大きい兄さんは僕とこの世で相見えていたときは、僕を全然非基督者の弟として見、そしてどんなにそのことのために祈られたことでしょう。

僕はすべてを察します、今に至りて。僕は大きい兄さんの歓んで握手して下さる者になりました。しかし、握手を求め、涙を以て感謝する今のこの身は、現世にて兄上と握手することが出来ません。何と云う罪人でしょう。兄の召されし後でやっと御恵を知るの身となった僕は、何と云う罪人でしょう。

神様よ、父なる神よ。何故にかくも兄上に苦盃を授け給いしよ。ああ神よ、かく為し給わざらんには、僕は救われなかったのでございましたか。何と云う罪人でありましょう。すべての偽善、虚偽、虚栄、貪婪より脱せしめ給え。十字架よ、僕にも。僕も十字架を。

友を、師を、身辺の人々を責むることなからしめ給え。すべて我に帰せしめ給いてよ。誠に誠に私が悪かったのでございます。私をして苦を負わしめ給え。それは誠に聖旨と知りますが故でございます。不当の責、これこそ主の負い給いしものならずや。主の僕、私も不当の責を。ああ、正当の責さえ負い得ないこの身に不当の責を。それははあまりに偽善の言ではないかとの反問が参ります。主よすべての罪をゆるし給え。私をして不当の責をも。迫害をも、願わくは負わしめたまえ。アーメン。讃美歌261。

○1925年6月19日（金）

晴。独乙語会あり。第2回なり。3時半より6時まで。先生の令嬢の手紙の朗読（独乙から来たもの）及びその訳は、かわいかった。それから、姉の方の詩の暗誦には感心した。我々高等学校生たるもの顔色なき感であった。今日の独乙語会で与えられたものは「練習練習、勉強勉強」と云う声であった。それは他の人に聞こえたか聞こえなかったかは知らない。少なくとも僕には強くひびいた。シルレルの「歓びへ」という詩を少し暗誦して行ったが、別に機会がなかったのでやらなかった。先生の最後の詩の朗読、ヘルマン・ヘッケルの短詩は僕には強く来た。もっともっと宗教的歓喜への連想を呼びおこさしめられた。来会者20名ほど。

金、金、ああ金に目のくらめる人。頭が金で占領されていると、問題の一は金、問題の二も金、問題の終りも金の人が居て、僕は不愉快でたまらない。これは感情である。しか

して一歩進んで考えると、かわいそうでたまらない。汝等の前途は見えすいている。地獄である。暗黒である。絶望の淵である。

その聖書は飾りものか。その讃美歌は、口の無聊のために無造作に放つためか。ああ、信仰おとろえて、アクマ（サタン）に属ける世の子よ、マンモンに拝伏する者よ。僕をしてかくまで怒らしめ苦しき祈りをささげしむる者よ。ああ、神よ、迷える人々を救い出し給え。ああ、神よ。いかに聖旨は深くしてこの器の貴きことよ。

我自身は毫も貴きものならず。神の聖旨貴きなり。神の深き貴き聖旨によりて、この小なる器も貴くせらる。この肉体、この霊魂――不完全、罪――にさえ聖旨ははたらき給いて世のために用い給う。聖旨の有難さよ。

然り、神よ、全霊全身を聖旨にゆだねまつりて、神の途を確っかりと歩ましめ給いてよ。貴き主イエス・キリストの御名によりて聞しめし給え。アーメン。

『旧約と新約』60号藤井先生著、来る。良き貴き友ぞ、来る。先生に感謝し奉ります。先生に従いて、祈りと感謝と讃美を共にさせてくださいませ。日本国のために、ああ日本人のために、切に祈ります。義憤を共に致します。

内村先生、先駆をなし給えり。藤井先生、畔上先生、佐藤先生、爛々たる輝星は相次いで現われてあり。日本国に是等の輝星の出でたるは！　然り、この群星に次ぐべく、我等をして聖光を輝かしめ給え。いかにその数は少なくとも、聖光をして益々輝かしめ給え。

ああ、いとも貴き使命、我が頭上に下りぬ。主よ、主よ、この重任。それは主、我と共に在まして、我、主の中にありて、主、我が中に宿りましてこそ果たされるのでございます。願わくは我が小智小能小躯に毫もたよることなく、常に主の愛、主の御力を受けさしめ、これを世に与え給え。アーメン。

「光をはなて、なんじ自らいかに卑しくとも、なんじの上に照り出でたるキリストの栄光のゆえに、なんじは世界に向かって光を放つことが出来るのである。」（『旧約と新約』60、14頁）

ああ、イザヤよ。ああ、エレミヤよ。

○1925年6月20日（土）

雨。

「偉大なる予言よ。遠からずして必ずや第二の、而して恐らくは最の、宗教改革が起こらねばならぬ。……しかしながら、我らは知る。教会の気付かないところに、職業的宗教家の触れないところに、選ばれたる少数の若き日本人の胸の中に、聖書が深く根をおろしつつある事を、キリストの御神が確実に「大和だましい」を捉えつつある事を。……今は実に我らの国の祝福されたる黎明期である。……」（『旧約と新約』60、258～259頁）

『旧約と新約』60は光り輝く。偉大なる予言に打たる。感謝、熱祷。藤井先生『旧約と新約』

第5年号60号を迎え、内村先生『聖書の研究』を待つ。

〇1925年6月21日（日）

晴後雨。本当にRegenzeit〔梅雨期〕らしくなって来た。湿気が畳までも襲って来る。午前は『旧約と新約』と『沙漠は番紅花（サフラン）の如く』とに導かれつつ、イザヤ書とエレミヤ書と詩篇とを開いた。161を心から歌った。藤井先生のお集まりに居るの心地がした。兄上の『基督の復活』序を開いて、また彼を偲び、我を思って、血が湧いた。然り、知れざる偉大なる力に攫（つかま）えられて、我が行路は我が知らざる方へ、已むを得ざるの道へ。幸なる哉との御声。而して、我が霊魂は鋭く緊張するを覚えた。

午後、富山茂君のところへ行く。途中、ナデシコ一株買った。彼、耐えなければならぬ1年の中に在る。彼を見て同情せざるを得なかった。しかし彼にとって善き試練を神は賜うたと感じた。彼がやや高慢に見えるところ、言いすぎるところ、悪く言えば智をふりまく様に見えるところのあるために、人から嫌がれ誤解されることをまねくは彼にとって気の毒なこと、また彼のなおすべきことである。もう一歩基督者的になれば、これがとれはしまいかと思う。いつか言えたら友として忠言してやろうと思っている。僕がそれに引かれない様に、かえって反対にうんと謙遜に出て、彼が自分の欠点を悟ってくれれば最もいい方法と思うが。ことさらにそんなことをするのも本意ではないと思うので。雨にふられて傘をかりて帰る。

〇1925年6月22日（月）

雨。兄上の日。安息日を安息日として暮らすことのいかに心安けき歓びのことよ。『旧約と新約』60、『聖書の研究』299を傘をかえすと同時に富山へ貸した。彼が真剣に僕と同じ感謝とアーメンを以て読んでくれんことを祈る。彼は僕より学者である。はるかに学者である。彼の如き友は、僕にとっては得がたい友の一人かも知れぬ。未来のルーテルとメランヒトンがここに生まれれば神様はどんなによろこばれるだろう。

どうも、僕の道は人の選ぶ道でない様である。否、たしかにそうである。僕の境遇は段々妙に僕を緊張させて行く。有難きことである。宛（あたか）も予言書に書かれたるが如く。予言者の言の成就し行くが如く。而してまた自分も予言者に作られて行くが如く。ああ神よ、願わくは神への絶対信頼の中に歩ましめ給え。神の御計画は我、はかることを得ず。我はただ神より離れて歩まざらんことをのみ。アーメン。

〇1925年6月23日（火）

雨後晴。ただ、なんとなくいやだから休む、ニゲル。それに、色々な気分や、薄弱な理由や、群集心理などが添って、わあーっと授業を受けることをやめて、教室を出て行ってしまう。

極少数の人はそのため、已むを得ず出る。こんなことがあるべきことか。僕は公平に見て、当然これに味方することが出来ない。何たる醜状であるか。そして、あとにはつまらない会議をもちだしたり、相談とやらを開いたり、いかにも事、重大かの如くかれこれと云う。ああ、あわれむべき徒よ。彼等は学校に於ては生徒である。教室に於ては先生に教授せらるるが義務である。たとえ先生の教授法が気に入らぬにしろ、先ず彼等はこれを受けて、最も之をよく利し、それより何ものかを得なければならぬ。生徒に真面目な意志があれば、先生を動かすことが出来る。適当な時に先生に注文すればよい堂々と。それまでは義務を果たすが生徒の任である。汝等は果たしてかれこれ口情を申したてるほど立派に毎日をやっているか。歴史の先生がいかに教え方が単調なりとするも、汝等は之に対する答が本当に出来るか。あまりに口情の多いのが現代人である。従うことの出来ぬのが現代人である。忍ぶことを知らざるがその弊である。僕は、理由なきにニゲルことは出来なかった。多くの同輩が何と思おうとかまわない。授業はたとえ受けられないにしろ、ニゲルことは出来なかった。若し総代の地にあるものなら、僕は皆を引き止めただろう。

今日は、国語が1時間あっただけで、あとはくずぐずですぎた。こんな気持の悪いことはない。不徹底なことである。統一、一致に至難なるは現代社会の通弊である。一大悪特徴である。守銭奴と、女の小口がましく物云うのとほど見苦しく聞き苦しいものはない。どこかへ飛んで行ってしまいたくなってしまう。禍なる哉！と云いたいことばかり、見聞きする社会環境たる哉。いずこへ行くとも然るか。

然り。現代社会に真の平和、真の歓楽境を見出すを得ず。然り。然らば我に覚悟あり。すべてのこの世のもの我に塵芥なり。我はすべてのこのけがれをきよめ。神の国をなさんがための神の聖旨にしたがいて、万難と戦い、愛を以て終始せんとするものなり。神の愛は烈火の如き愛あり。怒あり、涙あり、祈りあり。苦しみのはたらきあり。神よ、いかなることありとも、我を爾（なんじ）より離れしむることのみあらしめ給わざれ。アーメン。

○1925年6月24日（水）

梅雨間の晴。昨日のずべ休みは全部出席と云うことに決定した。色々な事情はあろうが、とにかく昨日の解決としては適を得ていることである。勿論、先生側の恩典である

いったい書物というものはそれ自身が悪い書でないかぎり、何か教えることのあるものである。主観的に書をよまねばならない。或いはこれを活眼を以てと云うか、とにかく内容と自分とを対象して読むことを肝腎とする。しからざれば、読書の価値はその大半を失ってしまう。

昨夜、女中が「帰りたい」と云って泣き出した(三弦さんたちお留守中)。これには全く困った。19で初めて家を離れたので無理もないといえば無理もない。ことに母の情が厚い家庭であるらしいので、一層親を思う情が厚いのであろう。気の毒になった。「淋しい、つまらない、

帰りたい」と云って泣く。しかし、これ位のことは、更に辛いことから較べればまだまだ何でもないことで、ことに初めて親の許を離れたのだからそんなこともあるかも知れないが、気をゆったりと安心する様に色々と云って聞かせた。終に泣きやんで、「寝る」と云ったので「心安らかに」と云って、彼女の神によりて歓びを得ん日の来らんために祈った。今日、不図、箱の中から内村先生の

「如何にせば基督者たり得るか」

というパンフレットがあったことに気づき、それを彼女に読む様にやった。彼女はかつて教会へ行ったそうだが、とても信ぜられないとのこと。それは全然、基督教へ入るの道をあやまっているからである。内村先生のこの書を読んだって、恐らく、すぐは「ああ、わかった」とは思わないだろう。その日の何時、彼女に臨むかを知らない。神様におまかせするばかりである。或は水泡に帰するかも知れない。しかし、僕の「義の愛」は彼女の霊魂の光を得んがためにこの書を呈せざるを得ないのである。神、もしこれが、彼女が光への道に入るの動機とならば、誠に感謝し奉ます。人の霊魂は律法によりて救われず、ただ神の御愛によるのみであります故に。

神よ、貪る人をあわれみ給え。彼等はあなたを真に仰ぐ事を知らざる人なればなり。彼等のために苦しくあります。悲しくあります。神よ、彼等についてあまり思うことなからしめ給え。我何の関わりあらんや。神よ、本当に心から神を仰ぎ、キリストを信ずる人の如何に少なきことよ。ああ、山羊のみありて、羊のいかに少なきことよ。

真に、我がために祈り、その人のために祈り、相共に神のために尽くし、信仰の道を歩み行くの「友」、我に一人だになし。親戚になし、校友になし、ああ信仰の友のなき我。然れども我、孤独ならず。彼に依りて、我に友あり。我が思う人は天にも地にもあり。彼等と直接の所謂交わりはなくとも、彼等との交際はいとも確固たるものなり。

ザミュエルよ！　イザヤよ！　エレミヤよ！　ヨブよ！　ダニエルよ！　ああ貴き友よ。人々の発する言がいかに私の耳にはいやらしく聞こえることよ。虚偽、虚栄、詐り、驕慢、その言には針あり。すべて毒舌なり。甘言に苦味を含む。ああ禍なる世なる哉。然り、政美兄上と共に「虚栄、虚偽の世」と叫ばん。

神よ、今よりのみ、我を苦しめ給え。爾、苦杯をさずけ給え。我はこの世と笑を共にし、貪りをなし、いつわりをなすにはあまりにも臆病なものでございます。神の前に、神、我と共に居ましていかでかかることをなし得んや。この世にある間、悪魔の兒等と戦わざるべからざる間、我歓びて苦杯を受けまつらん。

人類よ、人類の心たる我、汝等の亡び行くを見るにしのびんや。

人類よ、キリストを受けざるや。彼、その罪のために十字架にかかり給えり。

人類よ、ああ、我、如何に泣きかなしむとも、汝等を罪より救うの力なし。

人類よ、キリストは復活し給いて、今も、のちも永遠に在ますなり。

人類よ、すべては十字架と復活と再臨によりてなり。
我もまたこれがためにいと小さき「キリストの徒」として遣わされたり。全生涯をキリストのため、人類のため。

〇１９２５年６月25日（木）

晴、暑し。地久節にして武田の叔母様の御誕生日。御手紙を出す。四郎ちゃんにも出す。去年の今頃を思い出す。フットボールを夢中でやった。愉快だった。試験が近いのに、のんきな気持である。

〇１９２５年６月26日（金）

晴。浅薄なる基督者よ。偽善なる基督者よ。最も悪むべき敵よ。

「汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし」（ルカ21・19）〔ギリシヤ語〕

我はここにかたく立ちて、彼等と共になにもなさじ。彼等と共に讃美歌をうたいて薄信たらざるを得ず、禍なる哉。かかることをするにいかでしのびんや。我は顕然と選ばれたものなり。神よ、この確信の重きを敢えて言うをゆるし給え。

〇１９２５年６月27日（土）

晴。夏らしい一日。泳ぎたい様に暑い。85度〔約29.4℃〕に垂としていた。
読書は今日不断になさねばならぬ。ことに独乙語、英語に於て然りとなす。これ等の語学というものは、今日親しめば親しむほど、ナレテ、上手にもなり、わかってもき、早くも読めること、百も御承知のことである。問題は実行に在るのみである。やや実行したと感ずるときは、切にこれを感ずる興味が湧いて来る。しからばかなりの感動であろう。しかし油断は大敵、車の坂を戻り行くは速かであることを憶えざるべからず。所謂単語表なるものは愚である。それよりも本を手にすべきである。語学の勉強としては、精読をなす傍ら、必ず多読を要す。そして、僕の今としては多読を必要とする。たとえば、中学時代は精読の時代（傍ら文法の復習も少しはなすべきなれど）であろうと思う。今にして知りたるわけにあらざれど、やはり経験と思索によりて、切実に之を思う。学問に於て、たしかに僕は後れている。しかしまんざらの駄馬でもないことは神に感謝するところである。そこで計をなす。この夏は多読をしてやること。日本語の書も大部ある。独乙語もある。この二者。ことに独乙語をである。夏季講習はどんなものかしら。
Windelbands Fünf Aufsätze〔ヴィンデルバントの五つの論文〕、Grillparzers Medea〔グリルパルツァーのメデア〕、Goethes Faust〔ゲーテのファウスト〕。
とにかく独乙語をマスターしたいこと。小牧先生や実吉先生の様にうまくなりたいことは独乙語に対する僕の願いである。“Hiltys Assays”〔ヒルティーのエッセー〕はこの両先生に

習ったのだから永久に記念さるべき書であろう。その上、今習っている先生がGundert先生だから、独乙語は義理にでもうまくならなけりゃである。“Savobarola”〔サボナローラ〕を読む。書きたいことは沢山。しかし時間がゆるさぬ。彼は我が親友である。激励してくれる親友である。懐かしき友である。こんなに多くの〝親友〟をもって僕は身にあまるの光栄と嬉しさである。然り！　然らば爾(なんじ)もまた彼等から

「我等の友、日本の小池辰雄よ！」

と呼ばれる人間とならざるべからず。眼覚めよ、わが魂、心はげめ！　280。

雑誌！　現今行わるる多くの雑誌、これは人の子を害するものである。無宗教の国に行わるる雑誌ほど恐ろしいものはない（聞く、宗教国にても現今はその堕落甚だしいと）。堂々たる思想の雑誌までがその半を小説を以て満たすとは。ことに婦女子の読む雑誌にロクなものはない。すべていまわしき小説を載す。禍なる哉。これ等を好みて読むところの婦女よ、汝等は健全なる国民を産むべき使命を有する母たるべきものならずや。汝等の品性は重大なる影響を及ぼすものにあらずや。汝等は堕落の道を好むか。ああ日本の前途を憂う。読むものは新聞か雑誌。快楽とすることは何。ああ無宗教の禍よ、日本女子はもと、かかるものなりしか。物質的、外形的、欲望、虚栄に恋々たる婦女よ。我はその外形の美を見るほどその内容を察して慨嘆にたえず、またこれが一念願事なる現代男子を見て、二重に落胆せしめられる。一言すれば、現代社会は金と恋との奴隷である。すべての虚飾絢爛(きょしょくけんらん)は金と恋との象徴である。金と恋との上になれる空なる社会、金と恋とを去りて、何ものもこらざる社会！　ああ、人間社会とはかくの如きものとなり果てるのか！　ああ！　若し然りとせば、私は速(すみ)やかにごめんこうむりたい。

愛と義の全地を蔽(おお)うの日よ、如何なる時なるか。悪の世に、いと細く然れども鉄より堅く確かに愛と義とは保たれてあり、いずれの日かやがてすべての悪を打ちほろぼすの日来らん。その時ぞ待たる。

○1925年6月28日（日）

晴、夜雷雨。今暁、内村先生水戸駅通過、北海道よりの帰途。

午前9時半より小室に閉じ籠りて導かれつつ。

『沙漠は番紅花(サフラン)の如く』

の終りまで。何と信仰と信頼と確信と歓喜とに満ちたる書よ。書は我にありてかくありき。本当に有難かった。こんな嬉しい本が在るかと思ったときに、本当に僕は嬉しさを感じた。如何なる他の書も僕に本当に語ってくれないのに、ただ先生方の書のみ僕を。午前はかく有難く過ぎた。丁度12時を打つとき、246番を歌い終って祈った。

午後から入浴、一週間ぶりである。垢が出ることおびただしい。誰も居なかった。終始一人だったので気持がよかった。三弦さんとちづよさんとはどこかへ遊びに行かれた。午

後9時すこし前帰って来られた。男性的雷雨は実に気持がよかった。午後9時10分、就床。いさぎよく聖日を独り送って感謝であった。

人は何と云おうとも、僕は神をあざむいて人に興することは出来ない。誤解、迫害すべてよし。当然である。何となれば、彼等は神の聖旨を仰ぐことを知らざる故に僕と一致することの出来ないことは正然であるからである。彼等から変人と見られようと、非常識と見られようと、そんなことは関せず焉である。時には此れ位強いことを云っても神様は世に調子をあわせんとするよりよろこんでくださるだろう。

○1925年6月29日（月）

晴、雨。起床6時。一時間勉強。ルーテルのTable-Talk〔卓上語録〕は毎日読まずには居られなくなった。今、“Of Jesus Christ”〔イエス・キリストについて〕の課である。机上のルーテルが話してくれるのである。文字通り、卓上小話である。水戸のこんなところでこんな世にルーテルの熱烈なる信仰の説教が僕一人に行われているとは。さて、これほど有難く、僕は恵まれている！　さらば起たんのみ！

日常接している人に大層、かわいそうな人が居る。彼女の非基督者的なることはこまったものである。どうして彼女を本当にしてやれるかしら。僕は干渉することは出来ない。彼女は性格が強い。故に一層困難なことである。丁度彼女はまたある女性に似ている。その二人は僕の困った人々と呼びたい人々である。

小人は利害関係を一致しているときに馬鹿気て仲がよく、平和の如くある。しかしその共に楽しむところのもの、話すところの事は、僕の耳には吐嘔をもようしたいほどである。得々然たる彼等がかえって可愛そうでたまらない。本当ににそう思う。僕はもう彼等を妙な感じを以て見ることを全くやめたいものである。彼等を光にのためにこれが如何に絶望に見ゆるとも、僕はこのことのために忠実であらねばならぬ。それが僕の日常生活の小さき十字架であろう。真剣に十字架の道を歩んで、少しでもキリストの愛が僕から流れて、彼等へ届いて感じてくれれば本当に有難く感謝する。この一年はそのためである。そしてそれが水泡に帰する様に見えてもいい。神様はよくさばき給う。僕のすることは空ではない。而も毎日、僕のおかす罪の行がキリストの光をより深く打ち消すときに、僕は云われざる嘆きの祈りを捧げまつる。僕は信仰薄きが故に、己れの身さえ、したがって他人さえキリストを真にあらわし得ないからである。

願わくは神よ、神よ願わくは、あわれみ給え、我を。真の基督者、神よ、これのみを我が人生たらしめ給え。イザヤよ、エレミヤよ、パウロよ、ルーテルよ、ダンテよ、クロムエルよ、サヴォナローラよ、リヴィングストーンよ、ゴルドンよ。願わくは貴き友等よ、いと小さき我の友となり給え。導き給え、励まし給え、祈り給え、願わくは。アーメン。

試験の時間割が発表された。作戦計画をなした。今日から本当に目指す敵が目前に見え

た心地して、真剣になり得る様である。
雷、電光、豪雨、何と勇ましき天の使よ。彼等を窓外に友として、机に向かうとき勇ならざるを得ず。

○1925年6月30日（火）

あまり思うとおりに進まなくて気持が悪かった。基督者的勇気に乏しかった。家を持つ人（家庭のこと）に女中のことも一つの問題である。今、女中のことでサッパリとはこばない。同情の心が一つの円満な解決法かとも想われる。傍観者の僕に最もよく事情がわかっているが、容喙（ようかい）すべきにあらざる様に成行きを見るのみ。